


神田日勝記念館だより

 神田日勝記念館 〒081-0292 北海道河東郡鹿追町東町3丁目2 TEL(01566)6-1555



ゴミ箱 1961年

Contents

- 2 芸術鑑賞バスツアー
 絵画教室（十月）／絵画教室（二月）
 絵画学習会（三月）
- 3 冬休み子どもワークショップ
 子ども絵画教室
 子ども芸術鑑賞ツアー
 春休み子どもワークショップ
- 4 平成十四年度特別企画展
 『生命の証としての馬』
 関連事業
 ギャラリー・トーク
- 5 取材ノート
 『室内風景をめぐって』
 作品紹介
 『新たに発見された作品について』
- 6 寄稿文
 『存在感のある作品』 園田 郁夫
 『自分の中の神田日勝』 矢元 政行
- 7 感想ノートより⑮
 今後の事業予定
 鑑賞授業
 後期常設展
 新発売絵はがき紹介
- 8 友の会十周年記念事業
 『第八回馬の絵作品展審査講評』齋藤隆博

2003.3.31

18

絵画教室

十月八・十・十五・十七日・神田日勝記念館



村上俊彦先生（清水町立清水幼稚園長）の指導のもと、油彩による静物画に取り組みました。受講者は五名。まず、ひまわり・パンなどをモチーフに構図を決めて、下絵

をキャンバスに描きました。講師から題材の形をとらえるにはデッサンを重ねて描くことが大切だと教わり、熱心に取り組んでいました。続いて絵の具の使い方、説明を受けて、花びらの色や形を観察した後で、制作。最後に明暗を考へながら作品を仕上げました。

完成作品の一部は鹿追町民文化祭（十月三十一日～十一月四日）に出品し展示されました。

芸術鑑賞バスツアー

十月二十七日・札幌市

北海道立近代美術館で開催中の開館二十五周年記念「回想・北海道の二十五人展」を鑑賞。参加者は三十一名。この展覧会は同館の回顧展でこれまでに取り上げた作家を収蔵作品から選り二十五

年に及ぶ個人展の歩みを振りかえるものです。

この展覧会では神田日勝や岩橋英遠など北海道を代表する作家の作品が一堂に並び、参加者を魅了しました。「これくしょん・ぎゃらりい」では、現代の美術の「生命」をモチーフとする作品が展示され、特に子どもたちがクイズに挑戦しながら作品を理解するワークシートが用意されるなど、楽しみながら観覧できる工夫がなされています。



また、札幌市民ギャラリーで開催中の「第七十七回道展」をあわせて鑑賞。五百八十一一点の作品が会場一杯に並べられ、来場者は引き込まれるように見入っていました。

絵画教室

二月十三・十八・二十日・神田日勝記念館

「人物クロッキー教室」が昨年度に引き続き、十名の受講者の参加を得て実施されました。

初日は人物の描き方の説明を受けて、モデルの体の動きや特徴をとらえて描き、二日目は短時間で体の姿勢や動きをとらえるコツを学び、顔や手などの部分を集中して描きました。参加者は五分



から十五分の短時間で一つのポーズをつかむクロッキーに挑戦し、人物画の基本的な描き方を学びました。

最終日は作品の合評会を行い、お互いの作品の感想や、批評を述べあいました。

絵画学習会

三月十・十一・十三日・神田日勝記念館

油絵の基礎を学びたいという絵画教室受講者の要望をうけて実施されました。

講師は村上俊彦先生。受講者は九名。初心者はりんご、ざくろなどの果物を、経験者は人形などをモチーフに描きました。構図を決めて、下絵をキャンバスに描きました。絵の具などの使い方、説明を受けて、制作。

参加者の中には自宅まで作品を持ち帰り描いたり、時間より早く会場を訪れ制作を行うなど意欲的な様子が見られました。

色の濃淡などを注意しながら仕上げ、最後まで熱心に取り組まれました。



冬休み子どもワークショップ

一月九日・鹿追町民ホール

『小石とじゃがいも大変身!!』



おもしろい形をした小石やじゃがいもを使って、壁掛けと動物人形を作りました。参加者は小学生十五名。講師の金沢和彦先生（グラフィックデザイナー）が、見本の作品を見せると、興味を引いていました。まず、

壁掛け作りから。土台のベニヤ板に石をどう組み合わせるかを考え、決まるとボンドで接着、さらに色を塗ったりフェルトを切ったりして仕上げました。トンボや蝶、クマさん、顔などさまざまな作品が完成しました。

次に、じゃがいも人形作りに挑戦。マジックで眼を描いたり、針金を曲げて足をつけたり、フェルトを切って手や羽にしたり、折り紙の帽子をかぶせたりしました。細いものや、でこぼこしたものなどユニークな形があり、じゃがいもを選んだり向きを変えたりして工夫しました。ねずみや猫、じゃがいも人間などおもしろい人形ができました。どこにでもある身近な小石やじゃがいもから思わぬ作品ができあがり、参加者は満足していました。

子ども絵画教室

一月十四・十五・十七日・鹿追町民ホール

絵を描く楽しさを体験してもらおうと、小中学



生を対象に油絵講座が行われました。

講師は村上俊彦先生。小学生九名が参加。初日はかぼちゃ、玉ねぎを題材に構図を決め、下絵を鉛筆で描いた後、絵の具やパレット、筆の使い方の説明を聞き挑戦。二日目はかぼちゃなどの光が当たる部分に注意しながら制作。最終日は画面に深みや立体感をつけ仕上げました。完成作品は、冬休み中の課題として提出する予定の子どもも見受けられました。

子ども美術鑑賞ツアー

二月十六日・帯広市

絵本の魅力や面白さを知ってもらうため、北海道立帯広美術館で開催中の「絵本原画の世界展」の鑑賞ツアーが行われました。

参加者は小学生に、保護者や幼児などを加えた二十三名。館の職員からスライドを見ながら美術館と展覧会についての説明を受けました。



展示室では「おおきなかぶ」「くりとぐら」などよく知られている絵本の原画が展示され、絵本を実際に手に取って読むコーナーも設けられました。読み聞かせをする光景や、親子で楽しむ様子が見られました。子どもたちは小さい頃から親しんだ絵本を見つけ、興味深く鑑賞していました。

春休み子どもワークショップ

三月二十八日・鹿追町民ホール

『四こまマンガに挑戦!!』



講師に岩沢美香先生（イラストレーター）を迎え、四こまマンガ製作に挑戦しました。参加者は小学生十四名。まず、四こまマンガには、起承転結のストーリーを作ることを大事だという講師の説明を聞き、そのヒントを神田日勝の作品の馬

や人間など描かれているモチーフから探すために、神田日勝記念館を見学しました。その次に、新聞のチラシの裏紙にアイデアを練って絵と吹き出しを描き、岩沢先生からアドバイスや手直しをしてもらい、本描きに入りました。

神田日勝の作品から四こまマンガを作るのは、少し難しかったようですが、それぞれストーリー展開にアイデアを凝らし、皆熱心に取り組みました。完成作品は、鹿追町民ホールに四月二日から六日まで展示します。

平成十四年度特別企画展
「生命の証としての馬」

2002.11.12
2003.1.19



「瘦馬」 神田日勝 1956年
神田日勝は、生涯を通して馬を描き続けた画家です。この展覧会は、初期の『瘦馬』から晩年の『馬（絶筆）』までの画風の変化をたどり、なぜ日勝が馬を描くこ

とにこだわり続けたかを探ろうとするものです。併せて、馬を主題とした彫刻や版画などの作品から、馬の造形表現の特徴や人間との関わりも紹介しました。

泉秀雄の『冬の貯炭場』と阿部貞夫の『下曳』は、人間とともに働く馬を主題として、北海道の原野に生きるたくましさ、馬が生活に欠かせない存在であったことをうかがわせます。森田沙伊の『家のみえる厩』は馬の親子に対する作者の暖かい眼差しが、また本郷新の『馬と少年』は少年と馬とのほほえましい関係が感じられます。マリノ・マリ二の『騎馬像』はフォルムの追求による緊張感が、また本田明二の『馬頭』は生あるものの存在の確かさが感じられます。米坂ヒデノリの『問道を行け』は宗教的テーマの中に旅の随行者として口バを、また福井正治の『北方村落A』は、馬



「下曳」 阿部貞夫 1967年

櫓（ぼそり）を青を基調とした幻想的な画面に登場させています。木田金次郎の『青い太陽』では馬が自然に内包される存在として描かれ、パブロ・ピカソの『サーカス』では曲芸馬の一瞬の動きが見事にとらえられています。



「死馬」 神田日勝 1965年

一方、神田日勝の描いた馬は農耕馬であり、農業を生業とした日勝にとって身近な存在でした。

『瘦馬』は日勝が実際に飼っていた年老いた馬がモデルとされ、画家としての出発点ともいえる作品です。『死馬』では、馬は対象として客観的に眺められたのではなく、より肉薄した視線で毛の一本一本を克明に描き、胴引きの跡も忠実に再現するなど、細部に至るまで画家の馬に対する強いこだわりが感じられます。『馬（絶筆）』は、ベニヤ板に描かれた未完の馬が、強いインパクトで見ざる者にせまっています。

馬を描くことは、神田日勝にとって生きることと描くことの絶え間ない問いかけとして自分自身を投影したものだったのかもしれない。日勝の



「馬（絶筆）」 神田日勝 1970年
対象に接近する視線は、リアリズムを追求する客観的観照から、より対象の内部へと深く潜入する新たな具象絵画の方向性を示すものだともいえるのではないのでしょうか。

関連事業

講演会「人間と馬と芸術」

十二月十一日・鹿追町民ホール



この展覧会に合わせ、神田日勝の画友であった伏木田光夫氏による講演会が行われました。『人間と馬と芸術』の題名の示す通り、ギリシヤ彫刻の馬からルドンやムンクの描いた馬、そして出品作で

はマリノ・マリ二の作品に触れ、本田明二と福井正治の作品では友人としてのエピソードも披露し、馬がどのように表現されてきたかを美術史をたどりながら説明しました。

特に、神田日勝については、遠近法ではない彼独自の描き方が、リアリズムというより、実存主義としての方法論の中で展開されるといふところに、大きな特徴があると述べました。参加者は、伏木田氏の画家として独特な見方で展開する話に、熱心に聞き入っていました。

ギャラリー・トーク

一月十二日

神田日勝記念館展示室で、ギャラリー・トークが行われました。参加者は、ピカソの版画やマリ二の彫刻に見入ったり、木田金次郎や森田沙伊の作品の説明を熱心に聞いたり、神田日勝の馬を主題とする作品を比較しながら、鑑賞していました。

取材ノート

「室内風景」をめぐる



日勝のアトリエの小川敬信氏

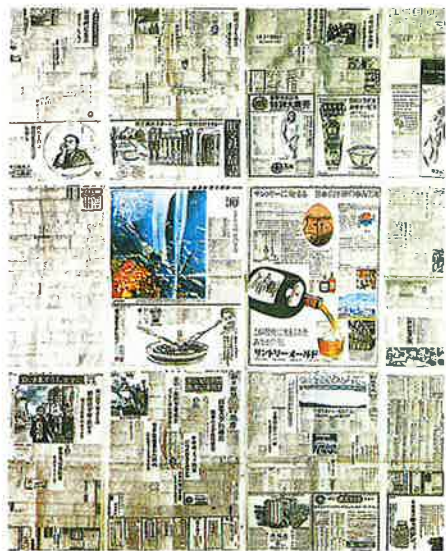
「神田日勝アルバム」を刊行したいという指しがあり一昨年より取材を続けている。その過程で「室内風景」について若干の知見を得た。それは絶筆「馬」（未完）の制作に着手した後、「室内風景」が制作されたというものである。このことは最初元NHKのディレクターであった山口明男氏の取材の過程で松本竹敏氏を紹介され、浦幌での松本氏の取材でそのことをほめかされたのに始まる。同時期美術評論家正木基氏も作品の研究を通じて「馬」と「室内風景」の制作順序に疑問を表明されたことも取材を続ける要因となった。

その後晩年日勝のアトリエを数次訪問したことのある高橋悦子氏（浦幌在住）の取材により、「室内風景」が高橋氏が日勝宅を訪問するたびに着手から完成までどの部分が描かれていったという制作過程についての克明な記憶をうかがい、さらに描きかけの「馬」について、高橋氏の問いに対し日勝がもうこれ以上は描けない（描くのが嫌になった）と話したというエピソードをご紹介していた。

さらに倶知安在住の徳丸滋氏からは「室内風景」の背景の新聞紙を描くヒントになったという作品を紹介された。日勝作品に新聞が登場するのは一

九六七年度の「画室E」とされている。紹介された作品は海老原暎が一九六九年に制作した「一九六九年三月三十日」。画面一面に新聞が描かれた作品である。この作品を神田日勝は徳丸氏と発表当時何かの雑誌か新聞と一緒に見た記憶があるという。この海老原作品は後年講談社の美術全集「新しい美術」に収録され、徳丸氏よりそのコピーをお渡しいただいた。確かに新聞の描き方に両作品は類似点があり、「ハイと人」「室内風景」における新聞紙の表現への影響を考えると年代的には合致する。この海老原作品は詳細な調査を正木基氏が実施されており、氏の論稿の発表が待たれる。

さらに近日小川敬信氏より晩年の日勝のアトリエで撮影した写真を提供された。失礼とは思いますが、アトリエを写した貴重な写真なのでここに紹介させていただきます。（菅訓章）



「1969年3月30日」海老原暎

作品介绍

新たに発見された作品について

昨年十二月と今年二月に、幕別町在住のお二人が



「風景」神田日勝 1967年頃

所蔵している二点の神田日勝作品に関する情報が寄せられ、調査を行いました。一点は、木村道子氏が所蔵している風景画で、ベニヤ板に油彩で描かれた六号サイズのもの。描かれているのは、小麦の刈り取りを終えた

十勝の晩秋の典型的な風景で、日勝は同様の構図で複数の風景画を描いています。二十一年前に亡くなった木村氏の夫で、当時鹿追町瓜幕で開業医をしていた彰氏が日勝に依頼して一九六七年頃に購入したものです。生前、日勝が往診してもらったこともあるそうです。この作品は、八月下旬まで当館で公開しています。

また、もう一点は、同じ幕別町在住の清野明子氏所蔵の風景画で、キャンバスに油彩で描かれており、日勝の描いた「湿原」とほぼ同じ構図です。清野氏は、この作品を兄石田康雄氏が亡くなった後、譲り受けており、兄の石田氏は能勢真美などの絵画を収集していたそうです。この作品も四月下旬から当館で公開する予定です。



「湿原」神田日勝 1969年

寄稿文

存在感のある作品

二科会会員 北海道支部長
園田郁夫

最近感じていることとして、最近の作品群の中で特に小器用に綺麗ごとに画面をまとめた油絵を観る度に日勝さんの作品の様な生命感のあふれた、むき出しのままを表現した作品は、絵を描くもの観賞する多くの人々に感動とエネルギーを与えてくれたものとして、貴重な存在を強く意識する。

多数の人々は今さらのように彼の作品群に魅せられ早逝を誰からも惜しまれている。彼が今、生きていたらどんな作品を描いていたのだろうか、具象からフオブ調の作品を通して、また具象的な作品に戻るのだろうか？全く未知のものであり、想像するのみで、絶筆・馬を観る度に言葉に表現しえない何物にもかえ難い作品として強烈な印象を与えてくれた。

短い生涯を精一杯充実し燃焼した結果として素晴らしい作品を残すことが出来たのではないだろうか。

日勝さんの作品に対する制作に当たっては、一作毎に精魂を傾けて、大作を多く残した。一九六一年「ゴミ箱」→「死馬」→「馬」→「飯場の風景」→「牛」、具象から急転換して「フオブ」調の「晴れた日の風景」→「人と牛」などの仕事を観る時、彼の仕事は誰の目にもこれからの仕事を観せてもらいたいと思わせる。

一九六一年頃に制作された作品が現在でも過去の時代を感じさせない生々しい現実として迫ってくる。彼の作品は現代に生きており、重厚マチエールと具象的に表現された人、牛、馬、静物、種々の



園田 郁 夫

1930年釧路市生まれ。二科会会員、新北海道美術協会会員。招待出品。71年、東郷青児美術館所蔵。73年、二科会会努力賞受賞。80年、帯広市役所新庁舎ロビー壁画制作。パリ、ローム、スペイン、モロッコ取材旅行。

生活用品など個々の存在を明確に表現した「美」のすごさと言うものに改めて感服させられるものである。小生の学生当時、美術の教師が語った言葉の中に、「芸術とは一種のアプリオリである。アプリオリとは自己が自己自身の世界を創造する内面的力である」と言うことを思い出し、制作とは相異なる多くのものから、一つのまとまったものを仕上げていくことで、制作は構成であり創造は生むこと、日勝さんは、優れた作家であり、自分の仕事から他から理解されるか、されないか等に神経をつかわない、疑問を抱かない、自分を納得させ満足させるために描いて、人を満足させるかどうかは問題外で、彼の自己信頼の力が今なお新鮮に作品を観賞する人々と、心と意が語りあえてこそ、作品が生きてくる。

観るものの心を引きつけさらに心の満足を与えてくれる作品であると信じている。

一九六八（昭四三）今から四十五年前、帯広市民劇場主催による三人展（市民ギャラリー）旧帯広市役所で、神田日勝、大戸秀夫、園田郁夫（独立展、全道展、二科展）出品作家展を開催。この展覧会で初めて彼はフオブ調の強烈な色彩対比と牛・人等の表現の存在感のある重厚な絵具のつき具合、原色に近色彩の調和、リズムを感じさせる作品群を観て脱帽をした。彼が小生にこんなことを話しかけた。「園田さん、バリはそんなに良くなかったでしょ？」

自分の中の神田日勝

矢元 政 行

昨年の夏「ACT5」のグループ展を神田日勝記念館で開催することになり、十勝に久しぶりに行って来た。晴れた日には、日勝峠から雄大な十勝の大平原が望める。私はいつもこの平原の地平線まで続く大陸的な景観に感動し、いつか自分の絵の中に取り入れたいとイメージしている。今回は残念ながら、霧雨で見ることができぬまま峠を下り、牧草や畑の中を貫く一直線に延びた道路を通り、やっと目的地の鹿追の日勝記念館に到着し、当たり前のように日勝の絵を見に行く。

記念館の日勝の絵は、もう何度も見ているが、深とした悲しい静かな絵の雰囲気は変わらない。館に入って、すぐに暗い茶褐色系のモノクロの「ゴミ箱」から「飯場の風景」、ペインティングナイフの強い圧力でペニア板に繰り返し擦り込んで描かれた「死馬」そして、正面に有名な「未完の馬」、続いて色彩あふれる「静物」「室内風景」と展示されている。最後のコーナーに小品と使用していた机と筆などが置かれている。久しぶりに絵を見たのだが、初めて日勝の絵と出会った時のように新鮮な気持ちで見ることができた。

私は、神田日勝のファンである。絵との出会いは、無我夢中で絵を描いていた学生の時である。偶然立ち読みしていた本屋で、美術月刊誌の「芸術新潮」に日勝の独立展に出品された「室内風景」が掲載されていたからである。雑誌の一面を占めていた絵は、私に強烈な衝撃を与えた。亡くなってからすでに三年が経過している。



矢元 政 行

1953年伊達市生まれ。北海道教育大学美術科卒。行動美術協会会員、全道展会員。88、93、94年安井賞展展覧。89年北海道・今日の美術一世紀末の風景展出品。91年第4回札幌時計台美術文化大賞展大賞受賞。94年第28回文化庁現代美術選抜展。2002年第21回安田火災美術財団選抜奨励賞展安田美術賞受賞。

実物の作品を見たのは、それから間もなく遺作展が道立近代美術館で行われた時である。雑誌の「室内風景」は、新聞紙を張りめぐらせた小さくて狭い部屋、中央に腕組みしている男が前を見つめている。灰皿、人形、目覚まし時計、バッグ、りんご、紙袋などの日勝の生活を感じさせる品々が床に散在している。多くの人は室内風景を異様と捉えているが、当時の日常の風景であると思っている。貧しくて、冬の厳しい寒さをしのぐために壁板の隙間の目張り新聞紙を張っていたからである。

日勝との出会いはなかったが、私は兄の神田一明先生から絵を学んだ、今でも思い出す絵がある。教官室の狭い部屋には、作品や画材が所狭しと置かれていたが、唯一残っている壁のスペースにその絵が掛かっている。五十号ぐらいの小さな絵で、芸大時代に行動展新人賞を受賞した作品と聞いている。ごつい机が置かれた何の変哲もない室内に干されたタオルがぶら下がり、ペインティングナイフで描かれた作品である。何度も真似しようとした私は、日勝の作品が兄の作品にかなりの影響を受けたことを実感している。

神田日勝は、三十二歳の若さでこの世を去ったが、長生きしていたら、今頃どんな絵を見せてくれたのだろう、やり残したことは無いのかもしれない、両方が混在した不思議な気持ちである。

鑑賞授業



鹿追小学校五年生の鑑賞授業が、特別企画展『生命の証としての馬』の会期中の十二月五日に、神田日勝記念館で行われました。展示館に合わせて製作された児童・生徒用パンフレットを手引きに、展示室で実際の作品を鑑賞しました。当日は二クラスが一緒に展示室で解説を聞き、事前に渡された資料やプリントを参照しながら、感想などを記入しました。

また、今年二月十日と十七日には、鹿追中学校一年生の鑑賞と模写の授業が行われました。休館日を活用して、じっくり神田日勝の作品について学びました。

後期常設展

最初に、鹿追町民ホールの視聴覚室で、スライドを使い、鹿追の景色や日勝の風景画、そして「静物」や「ゴミ箱」「飯場の風景」などを比較しながら遠近法と逆遠近法について学習しました。展示室では、実際の作品でもう一度構図の特徴を確認しながら解説を聞き、さらに各自が興味を持った日勝の作品を選び、クロックブックに模写を行いました。

一月二十一日に作品の展示替えを行いました。特に二階展示室では、木村道子氏所蔵初公開作品を含む十勝の晩秋の風景を集めたコーナー展示を行っています。畑には積みわらが点在し、画面やや上方に地平線を配した、十勝の典型的な秋の風景が描かれた、同様の構図の作品を三点展示しています。また、「離農」と「荒野の廃家は、ともに冷害と大規模経営化の進行による離農が加速した一九六〇年代後半の時代を反映した作品ともいえるでしょう。

四月下旬には、清野明子氏所蔵作品も展示の予定です。

感想ノートより⑮

8/1(日) 先生、おはよう。昨日の授業で、先生が描かれた絵を、とてもよく見て、感動しました。先生の絵は、とても上手で、色もきれいで、とても好きです。先生の絵を、私も描きたいです。先生、これからもたくさん絵を描いてください。

2002.9.28
二階展示室で、先生が描かれた絵を、とてもよく見て、感動しました。先生の絵は、とても上手で、色もきれいで、とても好きです。先生の絵を、私も描きたいです。先生、これからもたくさん絵を描いてください。

2002.10.2
先生の絵が、とても上手で、色もきれいで、とても好きです。先生の絵を、私も描きたいです。先生、これからもたくさん絵を描いてください。

先生の絵に、描いてみたい絵のイメージを、先生の絵を、とてもよく見て、感動しました。先生の絵は、とても上手で、色もきれいで、とても好きです。先生の絵を、私も描きたいです。先生、これからもたくさん絵を描いてください。

12/8
大阪から先生の家へ、お礼の手紙を書きました。先生の絵が、とても上手で、色もきれいで、とても好きです。先生の絵を、私も描きたいです。先生、これからもたくさん絵を描いてください。

先生の絵が、とても上手で、色もきれいで、とても好きです。先生の絵を、私も描きたいです。先生、これからもたくさん絵を描いてください。

12/15(日) 今回も先生の絵を、とてもよく見て、感動しました。先生の絵は、とても上手で、色もきれいで、とても好きです。先生の絵を、私も描きたいです。先生、これからもたくさん絵を描いてください。



荒野の廃家 1965年頃

今後の事業予定

平成十五年

◆ 神田日勝記念館開館十周年記念事業

- ◆ 「新世紀の顔・貌・KAO」展 (四月二十九日～五月八日)
- ◆ 開館十周年記念展 「室内風景をめぐって」(仮称) (八月二十三日～十月三十日)

- ◆ 関連ワークショップ (会期中、日時未定)
- ◆ 「神田一明展」 (十一月一日～三十日)
- ◆ 「飯場の風景」感想文の公募 (十二月六日～十日)
- ◆ 町民絵画展 (十二月八日)
- ◆ 生誕祭 (十二月八日)

◆ 「第九回馬の絵作品展」(十月十一日～十九日)

- ・馬の絵写生活 (七月十九日)
- ◆ 実行委員会事業 (六月十七日)
- ◆ 無鑿祭 (八月二十四日)
- ◆ 馬耕忌 (八月二十四日)

◆ 展覧会事業

- ◆ 「いのちの詩絵展」(四月二十九日～五月七日)
- ◆ 「人を描く」展Ⅱ (六月十七日～二十九日)
- ◆ 「石川文洋報道写真」展 (八月九日～十七日)

絵はがき新発売



「静物」1969年頃 油彩/ペニヤ

5月1日より
記念館受付にて販売致します。

第八回馬の絵作品展 作品審査講評

審査委員長 齊藤隆博

今年も、鹿追町民ホールに飾られた皆さんの絵は、実に個性的で大胆さに溢れていました。馬の姿を熱心に追及した作品は訪れた多くの人々に強い感銘を与えました。



嬉しいことに出品数は昨年を二百点程上回り、過去最高の千六百九十六点になりました。

そのため、昨年に引き続き二度審査をし、入選作品を選びました。どの絵も馬に注ぐ愛情がよく伝わってきて、出品された皆さん一人一人の持ち味が、生き生きと表現されていました。年々レベルの高い作品が多くなり審査に大変苦労しました。中でも、文部科学大臣賞を授賞した田中智穂さんの作品は、何かを語り合ような二頭の馬の上部を描いていますが、茶褐色の毛並みが丹念に描き込まれ、馬の温もりが伝わってきます。しっかりとした構成が画面を引きしめ、生命の息吹を感じます。特筆すべきことは、画面一杯に構図を工夫し、馬の重量感、毛並み、息づかいまで感ずる迫力ある作品が多かったことです。独創的な馬の姿を自分なりの色調で描き切った爽やかな絵も目立ちました。その結果、多くの作品が重厚さを増し、熱気が感ぜられるものになりました。昨年と比べ、馬と人



のほのぼのとした温かい関係や、地域行事の中の馬の表現が少しずつ増え、地域の特徴的な馬を表現した行事の作品が見られたことは喜ばしい傾向です。少し残念なのは、規格外の作品や版画、デザインを目標したものがあったことです。もう一度、出品要項を確認してから送るようお願いします。また、新たに今年から優秀な作品を数多く出品してくれた学校へ、励みとして学校賞を設けました。次年度も馬の絵作品展に向けて、管内は言うに及ばず道内、全国各地から馬に対する愛情溢れる作品を、多数応募して下さいることを願っております。

友の会十周年記念式典と誕生祝祭

神田日勝記念館友の会が平成十四年度に十周年を迎えました。平成四年十二月二日に、記念館建設運動に携わったメンバーを中核に創設された友の会は、馬耕忌(日勝の忌日)に画業と画家の生涯を顕彰・蕪壱祭(開館記念日)を祝う集い・特色ある展覧会事業等を主催し、日勝記念館を基盤として活動を積極的に推進するとともに、現在全国に百七十名の会員を有し、記念館の知名度の普及に大きな貢献を果たしています。本年度が節目の年にさしかかるところから記念事業を企画、実施しました。

【記念事業の実施】

◆田中光俊ギター演奏会(十二月七日)

十勝管内で演奏活動を地道に展開されている音楽家を招き、記念館展示室を会場に演奏会の場を提供し、その魅力を再認識していくことをねらい



とし、さらに十二月八日が神田日勝の誕生日であることから次年度以降誕生祭というかたちで催しを企画するという視点から、誕生祭プレイベントとして実施されました。田中光俊さんは第一回馬耕忌以来ギター演奏を担当されており、「F・タレガ生誕百五十年記念」と銘打たれた約一時間のミニコンサートは聴衆を魅了しました。



◆創立十周年記念式の開催(十二月七日)

田中光俊ギター演奏会に引き続いて記念館ロビーを会場に十周年記念式が開催されました。地元会員主体のささやかな集いでしたが、記念館の中で意義ある式を開催したいという友の会の希望に添う形で実施されました。協坂裕会長の挨拶の後、友の会の発展に大きな足跡を残された加藤寿志(友の会準備会代表)・高橋行夫(前友の会副会長)に感謝状が贈られました。(中村前会長は体調の関係で欠席)

式は村上里和NHK札幌放送局アナウンサーの司会で進行し、吉田弘志鹿追町長・長野から遠路駆けつけた窪島誠一郎信濃デッサン館主の祝辞を交え、ワインで交歓しました。

◆記念誌の発行

三月中旬、十年の歩みを主体とした記念誌『未完のあゆみ』(武田耕次編集長)が完成し配布されました。

